

---

# 春々恋歌

由樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春々恋歌

### 【Nコード】

N1153A

### 【作者名】

由樹

### 【あらすじ】

高校一年生の嘉山美帆<sup>カヤマミホ</sup>を主人公としたラブストーリー。美帆は過去にあったことで、自分でも気付かない程ダメージを受けているのですが…。

## 1：幕開け

ざわ…っ

うららかな春色の陽射し。

決して優しいとは言えない風に包まれて、ただ立っていた。

涙が風に乗り、散る様は、心をきゅっと軋ませそこはかたなく切なくなつた。

これからも忘れないように…

## 1：Prelude

「恋なんてしたコトないよっ?」

明るい口調で、あっけらかんと喋る美帆。

「ええ?でも、もう十六だよ?良いなあっと思う人くらいいるでしょ」明るい赤茶の髪色で、顔を綺麗に化粧している菜茄が驚きながら聞き返す。

「ほらあ、私って結構乙女だから?運命信じてるしいー」

と、冗談で返す美帆。

手を顎の前で組み、どこかのギャルを装った。

「マジでえ??あ、例の白馬の…?」

と調子を合わせる。

美帆は、

「そおなのよ。まっじイケメンでえー、怪我した美帆を、白馬でお城まで運んでくれるのっ」

というように妄想を膨らまして行く。

すると菜茄はいきなり真顔に戻り、

「でも白タイツなのよね」

と一言。

「そうそう、足が長くてステキ…っておい!!」

美帆は乗りツツコミをする始末。長く暑い夏休み。

外はかんかん照りで、アスファルトは干からびきっているように見える。

二人は涼むためにジャンクフード店に入り、カフェオレー一杯と軽食で何時間も粘っている。

「でも、本当に好きな人いたことないんだ？」

もう一度、確認しつつ訊く。

「ホントに」

少し眉を潜め、寂しそうな顔をしながら言う。

美帆と菜茹は高校で出会った友達。

当時の菜茹は髪の色が金で、メイクがゴキヤル風だった為あまり気が合うとは思わなかったのだが、席が近くなったことがきっかけで話が合うことがわかった。

それから二人は一緒にいることが増え、お互いに友達の輪が広がったのだった。

「なーんだ。美帆は一般的には可愛いからモテんのかと思ったのになー」

氷で薄くなったカフェオレーを少し飲みながら、つまらなさそうに呟く菜茹。

「あれ？可愛いのは嬉しいけど、一般的なのはどゆコト？」

靴からガムを取り出しながら聞き返す。

菜茹はガムを受け取って、

「だって私は可愛いと思わないし」

と言いながら包み紙を剥がす。

「随分キツパリ言ってくれちゃったわね。本当のことだから仕方ないけど」

美帆があっさり引き下がると、

「えつやだあ、ウソウソ！誰が見ても美帆はかわいいよ」と、わざと他人行儀な言い方をする。

「ああ嬉しい」

美帆もわざと投げやりな感じでそう言って、チラッと腕時計に目をやりながら、

「そろそろシヨップ見に行かない？」

と提案した。

「あーそだね、片して来よ」

トレイに空のコップと包み紙を置き、ダストに向かう。

「やっぱミユール買うよね。パンプスもまだ欲しいけど」

席に戻りながら菜茄が話しかける。

「美帆はねーバッグ欲しいっ。後ワンプも」

「あつワンプ欲しい！！可愛いの見つけたんだよね」

などと話しながら店を後にした。

§

「ふうー…、買ったね」

帰りの電車の中で。

「セール、すごく安かった！！びっくりだよ」

二人の手にはいくつもの大きなシヨップ袋が提げられている。

「しかも空いてたし」

「うん。ところで美帆さ、彼氏作る気ないの？」「えー、またそんな話？もちろん彼氏募集だよ」

笑いながら答える。

「だよねえー。私もそろそろ欲しいな」

菜茄は一ヶ月程前に、有名高校二年の粕芽君と別れてしまったのだ。三ヶ月だけの付き合いだったけれど。

「夏休み長いし、また遊ばー！いつ空いてる？？」

「部活もやってないし毎日暇してるよ」

「菜茄も。んじゃ、また一週間後に遊ばー」

「良いよお。カラオケとか映画行きたい！」

「映画…今何やってるっけ？」

「あれ見たいの！ほら……」

会話が弾みながら、時は流れて行った。

## 1：幕開け（後書き）

ほんつとに、これからなんです（x|x）盛り上がるのは6話位からですかね…（笑 栗山の初作品なので、感想たくさんお待ちします！

## 2：上の空

「はーるー」

真夏の太陽が照り付ける渋谷。

いつにも増してきちんとメイクした明るい笑顔の菜茄が駆け寄ってきた。

「あつれ、どうしたの??いつもより大人っぽい」

「うふー。ちよつと頑張ってみました」

菜茄は毎日メイクの研究に研究を重ねているらしく、将来はメイクアップアーティストになりたいとか。

「なんでえ?なんかあるの??」

美帆の質問に対してにやつと笑う。

「美帆に内緒で合コン設定しちゃいました M高二年のさわやか系イケメン達だよ」

「はっ、ええ?!何イキナリ、んなコトしてんのよ!私、合コンなんてしたことないしっ」

慌てふためく美帆。

「しかも私は軽いメイクだし…。シヨボいよお!!」

半泣きになる美帆。

「美帆はっ、行きません!!」

そして、こう結論を出した。

「ちよつと、何言ってるのよ。美帆も彼氏欲しいって言ったじゃない」

なだめる菜茄。

「私のためだつて言うなら、なんで前もって知らせてくれなかつたんさあ!それに、菜茄だけキメてたら美帆のためだなんて思えないっしょお?!」

混乱しすぎて、言葉がおかしくなる。

「だあーって、美帆は張り切りすぎりと空回りして変なカッコして

来そうなんだもん」

笑いながらそう伝える菜茄。

「それで…何時から何処でやるの？」

少し凶星だったらしく、反論せずに話を促す。

「一時からカラオケで。三対三でやるから、メンバーに莎梨南入れといたよ」

「莎梨南あ？別に良いけど、あの子って男の扱い方知り尽してるじゃん。一人舞台にならないの？」

「ああ、平気平気。私もそれなりだから。あんま慣れてると逆に引かれるし」

それがあの子のアマいとこなのよ と付け足す。

「ふうん…。そんなモンかね」

それなりって何さ、と心の中で突っ込みながら、二人は映画館に向かい、そしてカラオケ店の前で莎梨南と集合した。

「莎梨南あっ！」

細身の七分袖ジャケットをワンピースにはおり、茶色のロングヘアをくしゅっと巻いている。

「久しぶりー 二人共焼けてないねえ。ガツカリい」

人なつつこい笑顔で近寄って来る。

「今日って一コ上のM高校の人達なんでしょ？レベル高いよねえ  
思わず気合い入れて来ちゃったあ」

確かに、肌はいつもより艶やかで、全体的に水みずしい。

「莎梨南も？私もちよつと頑張ってきた」

菜茄も笑いながら話す。

ふと目を丸くし、莎梨南が、

「美帆はあ？あんま興味なさそうだよね」

と、いかにも悪気はありませんという言い方で美帆に話しかけてきた。

確かにどうやって合コンから逃げ出そうか考えていた美帆だが、敵意を感じとったので、笑顔で、

「友達増えたら良いなーくらいのノリだからね。楽しくなると良いよねえ」

と、アンタ程がつついてませんよ、とアピールしておいた。莎梨南は何故かいつも美帆を敵視しているようで（もちろん、それはさりげなく美帆にだけ伝わるようにしているのだが）、美帆は莎梨南が苦手なのだ。

「じゃ入るっか」

十二時五十分。

カラオケボックスに入る。

「もうすぐだねえ」

とウキウキ気分の莎梨南がソファに座る。

「折角だし、来るまで歌ってよつと」

カラオケが大好きな美帆はたまらず曲を入力した。

しっかりと透き通り、音域の広い美帆の声はとても心地良い。

気分に乗って、丁度サビを歌っているところで相手の男子が入って来た。

「うおっ、巧え！プロ並だし。オレ等ここで良いんだよね？」

入ってくるなりハイテンションで誉めるのが一人。他の二人も上手いと言う。

美帆は少し恥ずかしくなって、すぐに歌を止めた。

「あ、続けてて良いのに。キミ、歌凄いじゃん。名前は？」

にこにこ笑いながら話しかけられる。

「嘉山美帆です」

と美帆も微笑む。

「美帆かあ。俺は箕村雄三。雄三で良いよ」

「あ…じゃあ、雄三さんで」

「おい雄三！皆で自己紹介すんだから突っ走んじゃねーよ！」

二人に突っ込まれ、雄三は笑いながら席に座り、

「じゃあ、改めまして、箕村雄三です。部活はバスケットやって、楽しいのが大好きっす。よろしく！」

さつさと挨拶する。

次に、茶髪に一重瞼のクールそうな人が、

「讃岐明人、サッカー部所属。どうぞよろしく」

そして、

「三浦恭迅<sup>ヤストン</sup>。同じくサッカー部所属。ま、皆引退しちゃったけどさ。

よろしく」

と挨拶を終えた。

女子も紹介し終え、話始める。

莎梨南の女の子らしい気遣いや、菜茄の楽しい話術が炸裂する中、

美帆はその輪に入らなかつた。入ろうとしなかつた。

美帆の心の隙間を埋められるのは、その隙間を作った人だけだとわかつていたから。

皆、ちよくちよく話しかけてはくれたのだが 特に雄三 生返事で終らせていた。

心が遠くにあつた美帆は、最後に雄三に携帯の番号とアドレスを聞かれたときでさえ、上の空だつた。

## 2…上の空（後書き）

初の合コン…けれど、上の空。心の隙間とは一体…？といったところですね（笑）

### 3：お誘い

次の日の朝、雄三から美帆にメールが送られた。

《昨日は楽しかったねニまた今度遊びたいと思うんだけど、どう？》  
雄三さんって…ああ、あのノリが良い元男バスの人…だよな？曖昧な記憶の中を探し、見つけた名前。  
とりあえず、

《楽しかったですね。またいつか遊びましょう》  
と、当たり障りのない返事を打った。

そのメールを見た雄三は、脈薄かと少しがっかりした。

確かに昨日もあんま話弾まなかったんだよな…。

だが、時折見せる哀しげな瞳と無器用な笑顔が雄三の興味を惹いた。  
なのでめげずに、

《じゃあいつ空いてる？美帆に合わせるから言って！》  
と送る。

わあ…どうしよう。

確かいい人だったと思うけど、私は…。

《私は暇してますけど、菜茄とかはどうでしょうね？聞いてみます》  
》

と、二人きりのつもりはないことをアピールしてみた。

《菜茄か。恭迅がえらく気に入ってたな。(笑)俺も聞いてみんな》  
》

《莎梨南はいなくて良いんですか？》

美帆は莎梨南を忘れていたので、慌てて聞く。すると、

《莎梨南はいなくても良いよ…て、失礼だけだ。

(笑)なんか男慣れしてそうで苦手。(笑)美帆みたいに純粋な子が良いからさ。》

雄三はさりげなく美帆への好意を伝えたが、美帆はなんとも思わず、ただ莎梨南がいなくて良いことが嬉しかった。

そして美帆は菜茄に、

《菜茄 雄三さんが、菜茄、雄三さん、恭迅さん、私の四人で遊ぼうだって（\*^\_^\*）菜茄は予定どんな感じ？》

と送ると即返事が。

《やったあ 菜茄、恭迅良いと思って電話とかしてるんだあ、（ハワハ\*）暇だからいつでもオケー》

美帆はそれを読み、

《菜茄もいつでも良いそうです。》

と雄三に返事をする。

《恭迅も平気らしいから映画でも行こうか。カラオケで美帆の美声も聴きたいな。》

と、雄三も返事を出す。

さつき美帆を純粹だと褒めたのが通じてないのは残念だったのだが。

《映画良いですね。》

カラオケもぜひ行きましょう。日程はそっちで決めちゃってください。では。》

このそっけないメールで、美帆の気が自分に無いことがわかった雄三だが、まだ諦めてはいなかった。

一方、乗り気で無かった美帆も四人なら楽しいかもと思い直した。

元々カラオケは大好きなわけだし。最後に、

《日程は決めてもらうコトにしたよお（o< >o）映画とカラオケかなって感じ ヽ菜茄と恭迅さん応援するからねえ》

と菜茄にメールを送り、勉強を始めた。

### 3：お誘い（後書き）

初めて、友達以外の方に感想を頂きました。とは言え、栗山の稚拙な文章の良いところを頑張って探しててくださった感じで、恐縮ですつ（<人>）ありがとうございました。感想たくさんお待ちします。

#### 4：不思議（前書き）

時々夢を見るの

隣にいるのは忘れたくない人で

爽やかな笑顔も全部、消したくない人で。

だから痛みと共にいる

癒されることなど 望まない

#### 4：不思議

「ひっさしぶり!!」

海に行ったとかで随分黒く日焼けした、雄三と恭迅。

「あれー美帆？また痩せたんじゃないか？ちゃんと食ってるか？？」  
軽い口調で雄三が話しかける。

「食べてますよー」

夏バテをしていて、食欲が無い。

雄三の“また”という言葉に、まだ会って二回目だと言ってやりたかったが、そんな元気もないのでこう答えておいた。

「ホントホント。美帆、骨と皮だけじゃん？大丈夫う？」  
菜茹もご機嫌で冗談を言う。

元気な三人のノリが煩わしくて仕方なくなってきた美帆だが、映画館では休むことが出来た。

「よしっ、次はカラオケだなっ」

テンションを落とさず、カラオケで何時間歌うかということを知り、訊く雄三。

カラオケはたくさん歌いたい美帆だが、流石に気分が悪く歌える状況ではなかった。

「美帆お？具合悪いの？顔、真っ青だよ…」

ずっと無口な美帆を心配した菜茹が、移動中に話しかける。

「んー、ちよつと夏バテ気味。もう限界かも…」

弱々しく笑い、うつむきながら応える。

「ええ、そしたら菜茹一人じゃん。でも具合悪いんだもんねえ。氣い付けて帰ってよお」

「ん、ありがと。恭迅さんと雄三さんも、ごめんなさい」

では、と三人に軽く手を振り駅に向かう。

雄三が慌てて美帆を追いかける。

「あのさっ、俺送ってくから。家どこ？」

そんな優しさも今の美帆にはうつとおしいものでしかなかった。

「一人で平気なんで戻ってください」

少し棘を含んだ言い方にしたが、雄三は遠慮だと受け取ってしまい、「大丈夫！アイツら二人きりにした方が良いから。それに…美帆ふらふらしてて危ないよ」

と続けてくる。

「私が、一人の方が良いんですよ。二人でも話したりする余裕ないんで、気まづくなっちゃいますから」

楽天家で鈍感な雄三でも、機嫌 いや、気分がとても悪いことに気が付き、

「俺のことは無視してて良いから。ただ心配で着いてくださいだし」

「……だから、着いて来ないでって言うてるでしょ。こっちは迷惑なのっ！！」

いきなり大声で叫ぶ美帆。

そしてぐったりと、雄三の胸の中に倒れこんだ。

慌てた雄三は、まず美帆の呼吸が安定していることを確認し、菜菔に美帆の最寄りの駅と自宅の電話番号を聞いた。

「あ、ええと、嘉山？美帆さんのお宅でしょうか」

一瞬美帆の名字が思い出せず、つかえてしまった。

「失礼ですが、どなた様でしょうか」

感じの良さそうなお母さんで、美帆が倒れ、雄三が駅まで送ると伝えると、

「それはとんだご迷惑をおかけしまして…駅までは迎えに行きますので、どうかよろしくお願いします」

美帆を背負い、電車に乗る。（切符の関係で少々手こずった。）  
座席に美帆を座らせ、隣でしっかりと支える。

「ん…」

美帆の小さな声。

うつすらと目が開き、少し顔をしかめた。

「美帆。気分はどう？」

声のトーンを落とし、囁くように訊く。

「え…？雄三さん？」

焦点の合っていない目で雄三の方を見る。  
顔色は元の色に近付いていた。

「具合悪くて、倒れちゃったんだよ。覚えてる？」  
倒れた…？

全く思い出せない。

確かにずっと不調で、でもカラオケ店の前に行ったことまではなんとなく覚えている。

いつ電車に乗った？

菜茄と恭迅さんは…？

「あの二人はまだ遊んでるはずだよ」

美帆の疑問を察したのか、そうでないのかわからないが、美帆が知りたいことを口にする雄三。

「あつ…迷惑かけちゃってごめんなさい」

か弱い声で精一杯謝る。

皆の楽しい時間に水を差してしまったことは明らかだったから、余計にやるせない気持ちが込み上げてきた。

じわ……

具合が悪いこともありナーバスになっている美帆は、涙を流し始めた。

一瞬ぎよつとした雄三だったが、

「そんな泣くなよ。迷惑なんかじゃないし。つか美帆といれるだけで嬉しいしさ」

と言った後で、何故自分はこの子のことをこんなに気にかけるのだろうと不思議に思った。

好きな女の子のタイプといえば明るく可愛い子で、どっちかと言えば菜茄みたいな子なのに。

よりによって、どうして公衆の面前で人を怒鳴ったり（これは具合が悪いせいだが）、あまり笑わないような子を…？

笑わないとは言っても、菜苗にはよく可愛い笑顔で話しかけていたし、歌っているときなんかは物凄く清々しい顔だった。

多分、自分を含む男子に一本線を引いているということなのだろうが…。

「あ、降りなきや」

おぼつかない足取りで歩き出そうとする。

危なっかしくて、体を支える。

その瞬間だけ美帆の体が怖ばったが、抵抗する気力かないのか、無意識にそうしてしまったただけなのかすぐに身を委ねてきた。

§

「美帆！」

落ち着きがあり、透る声が改札越しに聞こえてくる。

「もう。具合悪いなら無理して出かけたりしちや駄目じゃない。箕村君みたいなちゃんとした人じゃなかったら、どうなってたかわからないわよ。さ、お礼言つて」

母親に支えられながら、

「ありがとうございます」

とか細い声で言い、うつ向いた。

「箕村君、これちよつとした気持ちです。ケーキだから、ご家族で召し上がってくださいな」

にこつと笑いながら手渡す。

こんな時は下手に遠慮すべきではないと心得ていたので、

「わざわざすみません。遠慮なく頂きます」

と同じく笑って会釈し、

「ではまた。どうぞお大事に。失礼します」

と、ホームへの階段を降りて行った。

美帆と美帆の母親はゆっくりと駐車場へ向かっていった。

#### 4：不思議（後書き）

美帆の夏バテと共に、少し話が進みそうな気配が（笑 雄三は何故  
美帆に惹かれているのか。：人が良すぎですよね。

## 5：お電話

徐々に夏バテの症状は回復し、笑顔で話せるようになった。

美帆はだんだんと記憶を取り戻し、雄三にひどく失礼なことをしてしまったのに気付いた。

《この前はありがとうございました。

雄三さんが優しくしてくれたのに、怒鳴っちゃったりしてごめんなさい。家まで送ってくださって…感謝しまくりです（<|>）今は元気になってきてます。》

…なんで私って、いつも雄三さんへのメールはテンション低いんだろっ？

他の人には、マジ元気なのになあー。

突然、携帯の着信音が鳴る。

「ふわっ?!」

不意なことに驚いて声をあげてしまった。

「はい、美帆です」

「あ、声元気そうだね」

優しく静かな声で話す雄三。

本当は明るい人なのに…私が本調子じゃないから気遣ってくれてるんだ…。

しみじみ思った。

「はい、お陰さまで」

「良かった。今度は元気なときに二人で遊び行こう」

二人…で？

少し躊躇った。

私の心はまだ、達也の…

「早く元気になりますね」

遊びに行くことには答えなかった。

我ながら、うまい切り返しだったと思う。

あつちが少し黙ったので、

「わざわざお電話ありがとございました。それではまた…」  
ピッ

少し一方的だったかなと考えながら携帯を机に置く。

「誰？もしかして雄三くん？」

キッチンから歩いてきながら話しかける母親 美幸。

彼女は一度見ただけの雄三を、あの子は人柄が良いだの、きちんとしているだの、とにかく褒めまくっている。育ちがとても良いはずだ、とも。

「そおだよ。心配してくれてるみたい」

「ならそっけなくする必要ないじゃない」

苦笑しながら言う。

「だって…元気になったら二人で遊ぼうとか言ってくるし」

「雄三くん嫌い？」

単刀直入に訊いてくる。

「嫌いつて…いい人とは思っけど…」

「私、雄三くん良いと思うわぁ。キリッとした目してたし」

それは私も思っけど。

「またそんなこと言って…。ママってホント、雄三さん好きだね」

呆れたような口調で腕をくみ、背もたれによっかかる。

「いつまでも、達ちゃんのこと想っっても仕方ないでしょう」

少し厳しい口調で美幸が言う。

どき……っ

達也の…

「達也のこと持ち出さないでよ！全然関係ないじゃんっ」

思わず語気を強くしてしまった。

いきなり怒鳴ったものだから少し頭がくらつとした。

「関係ないなら騒ぐことないでしょう。まだ高校生なのに、一度の失恋でそんなになっでどうするのよ」

「たかが一回でも私には大きな一回なの！！ママに知ったように言

われたくないよ！」

本当はもちろん、達也のことが胸の中でしこりになって残ってる。

だからこそ、言わないで欲しい…。

彼のことを忘れることは決してないけど、あの悲しみをここままで鮮明に思い出すことはなかったから。

## 5：お電話（後書き）

だんだんと話が形になって来た気がします。22話くらいで、一旦  
終わりますよ ミ

## 6：昔の事

中学三年間、私と達也は同じクラスだった。

よく、バスケやサッカーなどのスポーツの話で盛り上がっていた。なんでも相談出来て、大切な友達。

だから、時が経つに連れてお互いのことを好きだと思ったのは、とても自然なことだった。

付き合っつきっかけは、達也の“付き合っちゃうか”という言葉。はにかんだ表情が忘れられない、十四の夏…。

その頃は部活まっ盛りで、達也の所属するバスケ部はどんどん活躍していった。

私はジャズダンス部で自分を鍛え、メンバー全員が理想のプロポーションを手に入れた。

たまに行ける達也とのデートはとても幸せで、楽しかった。何もかも、満ちたりていた。

中三の修学旅行で夜中、森へ抜け出して、満天の夜空の下で約束した。

卒業しても、また一緒に来よう

嬉しくて、でもなんだか恥ずかしくて。

答える変わりにキスしたんだ…。

だけど、幸せって続かないモノなんだね。

たくさん星が、キラキラ祝福してくれていたはずなのに…。

卒業式前の日曜デートの、最後にあなたはこう言った。

他に好きな子が出来たから…別れよう

時々貴方が沈んだ顔しているの気付いてた。

だから元気づけようとデートに誘ったのに。

さよならするためじゃ、なかったのに。

最後のキスは涙で見えなかった。

大好きな、ぼかぼかした春の空。

私一人だけ、取り残された。

§

「疲れたから、寝る」

ふてくされたような口調で立ち上がり、階段をゆっくり昇る。

泣きたくなくなった。

泣きそうだった。

でもだめだってわかっているから我慢した。

自分でも過去のことばかり気にしてるなんてバカらしいと思う。

でも私は弱くて。

とても、弱くて…。

支えがない今、どうすれば良いのかわからない。

## 7：恋の病

一晩、寝たり起きたりしながら考えた。

私には頼れる誰かが必要なんじゃないかってこと。

不安定な私を全部包みこんでくれる、優しくて大きな存在。

雄三さんは…多分、好意を持ってってくれてる。

でも、こんな私を認めてくれるかはわからないし、私自身雄三さんに全てを任せられるのかはわからない。

もうずっと恋の病だよ。

§

《突然ですけど、雄三さんって好きな人いるんですか？》

具合が悪いという人からいきなりこんなメールが着たら、どう思うだろうか。

雄三はどんな意味なのかと、不思議に思った。

この前、電話を切られてしまったばかりなのに。

今までのことで、自分に好意があるから訊いてきたのではないことは重々承知している。

《もう全快したの？》

と、雄三は気になっていたことを尋ねた。

《あ、はい。ぼちぼちです。》

美帆は予想に反した返事が着たので、少し挙動不振になりながらも返事を打った。

《そっか、良かった。ちょっと気になってる子はいるよ。》

《誰ですか？学校の人？》

なんだかいやに突っ込んでくるなあと思いながら、

《いや、町で知り合った人。》

と曖昧な返事しておく。

《私が知ってる人なら協力しますよ。助けくれたお礼です（^ - ^）》

…ああ、そういうこと。

このメールを見て、雄三は落胆した。

美帆の眼中に自分は全く入っていないことがわかったから。だが、裏を読むと、わざと雄三の気持ちに気付いていないふりをしているということも出来る。

これはあくまで雄三の希望に過ぎないのだが。

《協力なんて良いよ。お礼の代わりに二人で遊びに行こう。》

この返事を見て、今度は美帆が落胆した。

もう諦めてくれると思ったのに…。

内心は、もし諦めなければ自分を包み込んでくれる人になってくれるかもしれないと、淡い期待も抱いていたのだが。

……ふう。

溜め息を軽くつき、

《わかりました。どこ行きますか？》

「……よおっしー！」

メールを見た瞬間に左手でガッツポーズを作り、意気込む。

…さて、どこにしようか。

いきなり自宅というのもアレだし、やはりカラオケ？

《渋谷・原宿辺り歩いて、カラオケは？》

《カラオケ好きなんですか？私も好きですよー。》

知ってるよ。楽しそうに歌っていたから。

《じゃ、決定な。体調に気を付けて。集合は八千公前に朝11:0

0！遅刻厳禁！！以上。》

11時かぁー、とのんびり思っていると、

《明後日な！》

と付け足しのメールが着た。

ぷっ

思わず笑ってしまう。

以上、なんて言って終らせたのに。

どこか抜けてるんだから…。

雄三からのメールをじつと眺めていた。  
美帆の心に愛情が沸き始めていたことには、まだ誰も気付いていなかった。

約束の日は、いつもあまり履かないスカートにした。

ピンクデニムの薄い迷彩柄。

黒にライNSTOONのハンチングもアクセントになっている。

メイクも、アイシャドウを三色使いにしていつもより華やか。

今日は気分が良いから、お気に入りのピアス、ネックレス、ブレスも付けていった。

リングは…達也とお揃いだったり、買ってもらったりで付ける気にはならなかった。

「ごめん！うちの犬がさ…」

遅れたことを謝りながら駆け寄ってくる雄三。

雰囲気の違い美帆に驚き、少し顔を赤らめた。

「犬何飼ってるんですか？」

別にそれ程遅れて来たわけでもなかったの、微笑みながら訊く。

「うん。プードルのアプリコット。名前は梅」

「プードル？やだあ、可愛いですね」

笑う美帆。

いつもと違う…。

こんなところどころ表情が変わる美帆を初めて見た。

(まだ三回しか会ったことはないのだが)

前たてた自分の仮定が正しければ、これが本当の美帆だということになる。

何がキツカケだったか、心を開いてくれたのかもしれない。

「今小六の妹が欲しいって騒いで。俺はドールマンが欲しかったのにさあ」

少しふてくされたような顔をする。

あはは、と美帆が笑い、

「でもプードル…梅ちゃん可愛いでしょ？」

と訊くと、

「もちろん！ちっこいのがたかたか歩いて、ちっちええ舌でペロペロ舐めてくんだぜ？可愛くないわけがない！」

いやに力説する。

「どうやら相当の親バカらしい。  
「いいなあ。美帆ん家、犬飼えないの」  
「マンション？」

「んん。昔飼ってた犬が死んじゃった時に悲しかったから飼いたくない母親と、犬アレルギーの父親だから」  
溜め息をつきながら言う。

「でもねー、大好きな犬がいなくなったら寂しいから、ママの気持ちよくわかるし。パパは動物大好きなのに飼えないんだもん。私はなんにも言えないなあって」

眉を軽く八の字に下げ、上目使いで雄三を見る。（これは身長差のせいだが）

「あの…もし良かったら、今度家に呼んでもらえませんか？妹さんにも会ってみたいし…」

言いにくそうに、苦笑する美帆。

「あつもちろん良いよ！！散らかってるけど…いつが良い？」  
間発を入れずに言う。

「私は暇してるから、新学期の九月三日までは空いています」  
「ああ、わかった」

思いがけない美帆の申し出に心躍らせる雄三。

「お母さんはどんな方ですか？雄三さんに似てます？妹さんも可愛  
いんだらうなあ」

心底楽しみという風に喋るので、雄三はなんだか照れ臭くなった。

「妹は受験生だから、夏休みはずっと塾なんだ。自習室にいるらしいよ」

「受験かあ…。偉いんですね」

「妹 恵実はさ、将来東大行く！とか言ってる。確に頭は良いんだ

けど…大学卒業後のこととか考えてないんだよな」  
空を仰ぐ。

「まだ小六なのに大学のこと考えてるなんて尊敬しちゃう…」  
美帆は将来やりたいことなど、全く見えていないから。  
お金に困らず、標準的な生活が出来ればそれで良いのだ。

もし会えたらどんな話すれば良いかな…。

ふと眼鏡をかけたガリ勉風な少女を思い浮かべてしまう。

生憎、自分はそんな少女を感心させられるような知識は持ち併せていない。

まあ、良いや。

会うと決まったわけじゃないんだし。

そのままそのことは忘れて、カラオケを思う存分楽しんだ。

二人きりだから歌うのも緊張するかと思いきや、恥もへったくれもなく歌えたのだ。

クレープとドリンク代は雄三が奢ってくれた。

「きゃあ！このプレス可愛くないですか?!」

道を歩きながらはしゃぐ美帆。

シルバーのものと革のそれがある。

「二つで九百円なら安いですよねっ。買っちゃおうっ」と

「革のヤツかっけえじゃん。俺も別口ゴ買っちゃおう」

にかつと笑い、おソロ〜とはしゃいで見せる。

美帆も一緒に笑う。

「じゃ、帰りますか」

店を出て一言美帆が言った。

時間は…午後五時。

ちよつと早すぎやしないか？

合コンの時は七時に解散したのに…。少し戸惑っていると、

「行きたいトコあるんですか？」

と不思議そうに訊いてくる。

「いや…特にないんだけど…」

しまった、と思った。

適当な理由をつけてもう少し歩けば良かったと言つのに、正直者の性だ。

「良かった。じゃあ帰りましょ」

笑顔で歩き出す。

こうなつたら仕方ない。

今度の自宅デートでカタをつけよう。

それにはまず、部屋の大掃除が必要不可欠だ…。

「ええー？今度家行くの?!」

電話越しに響く茹菜の声。

こうして喋るのも随分久しぶりだと思う。

「具合悪いとか言いながら、ちゃっかりゲットしちゃったんだあー」  
少し不満げに言う。

「ゲットなんてしてないよっ。ただ、犬を見に行くだけ、雄三さんのこと好きかなんてわかんないし」

「でもどーせあっちは気があるよ。キープってこと?」

やたらとツツかかってくる。「何かイラついてる?当たってきてない???」

落ち着かせようと話す美帆。

一拍置いてから、

「別になんもないけど」

変に口ごもる。

「本当に?」

真実を言わせようと促す。

「…だあって、具合悪いつてからそつとしようと思つて連絡しなかつたのに、いつの間にか元気になって雄三と遊んでるんだもん。」

…心配してたのに、ム力つくじゃん…」

最後の方はなんだかかすれて、絞り出すような声だった。

「あ、ごめん。雄三さんに送ってもらったもんだから、最初に連

絡しなきゃってそれしか思わなくて…。心配してくれて有難うね」  
申し訳なさで一杯になる。

「うん、どおいたしまして。でも良いなあ、美帆はうまく言ってる、意外な言葉に驚き、即座に、

「恭迅さんはどうしたの？」

「ああーうん。あの後カラオケは行ったんだけど…イマイチ盛り上がんなくて」

また奥歯に物が詰まったような言い方をする。

美帆のことが気になって落ち着かなかった…なんて言えるわけないじゃない。

菜茄は冷や汗をかいた。

「あつ、それにい、帰りの電車代出してくんなかったの。貢がしたいわけじゃないけど、氣い利かないんだ」

「そゆモンなのお??」

苦笑しながら答える。

「まっ、アンタは初恋とやらを体験しなさいな。頑張れよー」

本当は初恋…じゃないんだけどな。　　って！

「ちよつとお！私は好きになんかなくてないからねえ?!」

と電話口に叫ぶ。

菜茄の笑い声が聞こえた。

## 8：デート（後書き）

なんとか二人の距離が縮まって来た感じがありますよね。もちろん、このままくつつくなんてことはないんですけど…（笑）感想や評価どうも有難うございます！これからもお願いしますね。

## 9：箕村家

「美帆」

「ごめん！父親に、男友達の家に行くって言ったらお説教じみたことされちゃって…」

「ハアハア…」

息があがる。

待ち合わせ場所は、箕村家の最寄り駅近くにある公園。

「迎えに行った方が良かったかな」

「いえ！！父親、ちよつと心配性なんですよ。犬見に行くだけだから大丈夫だって言ったのに」

笑いながら言ってるから、少ししまったと思った。

でも今更、私は心配してない等と伝えるのは逆効果だと思い、敢えて何も言わなかった。

「箱入り娘ってやつか」

笑う雄三。

「あ、着いたよ」

見るとそこには真っ白な外壁の豪邸が。

「これが雄三さん家なんですかあ？めっちゃ大きいですね…っ」

美帆の家が三つ丸々入りそうな巨大な家。

それプラス、広く整った庭も見える。

話によると、裏にはバスケットコートやテニスコートもあるらしい…。

「いらっしやい、お待ちしてました」

初老の女性が玄関に出迎えてくれた。

「初めまして、こんにちは。雄三さんの友達の嘉山美帆です。お邪魔します」

「こんにちは。ごゆっくりなさってくださいね」

にこやかに笑い、スリッパを差し出す。

「有難うございます。あの…粗末な物ですがお土産にケーキを持って来ました」

「あら、前も頂きましたわ。もしかして…倒れた方？」

「あつ、そうなんです！その節もお世話になりました…同じところのケーキですみません」

「いえいえ、前も奥様と一緒に頂いて、とても美味しかったわ」

…ん？奥様って…。

「あら、美帆ちゃんね？どうぞ入って。水嶋さん、早くご案内して奥の扉が開いて、すらっとしたモデル体型の女の人が歩いてきた。無地のワイシャツにジーパンというラフな格好なのが、気取っていなくて親しみを持ってた。

“奥様”ってことは…水嶋さんって人は家政婦さんだったんだ。

これだけ大きな家だから、よく考えたらいるに決まってるよね。

でも…なんの仕事してる家なんだろう？

急に自分は場違いなのではないかという不安にかられながらも、雄三に促されリビングに足を入れた。

並ぶ家具はとても高価そうで、威厳がある。

けれどゴテゴテと飾り立てられているのではなく、シンプルで持ち主の趣味の良さが反映されているようだ。

フローリングに敷かれたふわふわの真っ白なカーペットには汚れが一点も見当たらず、掃除が行き届いている。

「じゃあこの辺に荷物置いちゃって。座るのは椅子でもカーペットでも良いから」

「あ、ええと…」

雄三に言われた通り、これまた立派なソファの上に鞆と帽子を置きながら、

「カーペットにします」

ふわふわな見た目にとてつもなく惹かれた。

「うん、じゃあ座ってて。飲み物持って来るよ」

キッチンか何処かへ向かおうとする雄三。

「あら、おぼっちゃま。紅茶とクッキーをお出ししますので、お座りになっていてください」

さっきの家政婦さん 水嶋さんが雄三さんに向かってそう言う。

「有難う。じゃあ、今もらったケーキもお願いします」

ぱたぱたと部屋を出る水嶋さん。

「すごいね、雄三さん。おぼっちゃまなんだあ…」

驚きでぼーっとしてしまう。

こうと知っていれば今日の服装 花柄の膝上三センチのスカートに、シンプルなキャミソール、そしてターコイズのネックレス も、もう少し落ち着きのあるワンピースにしたのに。

「昔からこうなんだ。おぼっちゃまとかいい加減恥ずかしいんだけど…」

照れ臭そうに話す。

「あんなに素敵なお母様と…家政婦さん？憧れちゃうよ」

「そっかな」

また恥ずかしそうな顔をしながら、

「あつ、梅持って来るよ」

うめ…？

食べ物のすっぱい梅を想像しながら、

「うん」

と頷く。

チャカチャカチャカチャカ…

ドアが開いて、足音が聞こえてくる。

「あつ、梅ちゃん！」

先程思い描いた物とは全く異なる可愛い生き物 プードルの梅ちゃんだ。

ここに来た目的をすっかり忘れてしまっていた。

「爪切るのさぼってるから痛いかも」

雄三が苦笑いする。

「爪切りとかシャンプーとか、店に頼むつもりだったんだけど、恵実が自分でやんなきゃ意味ない！とか騒いでさ。なのに今は勉強ばっかで梅を放つたらかしてんだよ。困ったやつだ」

美帆の隣に座りながら溜め息混じりにそう言う。

梅は雄三にだっこをねだっている。

「コイツ、恵実のこと好きだから、寂しがってさ…代わりに俺に甘えるってワケ」

「そうなんだあ…」

つんつんと梅の鼻をつつきながら、

「おいで」

と呼んでみる。

余程甘えん坊らしく飛び付いてくる。

「あっははははっ」

顔をぺるぺる舐められながら騒ぐ美帆。

「本当にちっちゃいねえ！食べちゃうぞおっ」

ぐわ〜と言いながら梅の前で口を開ける。

梅は閉じた口をぺるぺる舐める。

「可愛いよなあ」

とんっ

しんみりと言いながら、美帆の肩に顔を乗せる雄三。

「誰が？」

と、肩の顔を見ながら訊いてみる美帆。

じつと美帆の顔を見つめて、

「美帆が」

と囁く。

思わず顔を赤らめる美帆。

「ちよっつと、やめて。私すぐ顔、赤くなっちゃうんだからっ」

少しテンパリながら肩を上げて雄三を離し、その顔に梅をくっつけた。

「むっっ」

梅は物凄い勢いで雄三の顔を舐める。

そこで水嶋さんがやって来た。

「まあまあ、楽しそうで良いですねえ」

にこやかにテーブルに紅茶のポットとカップ、そしてクッキーとケーキを置く。

「うわあっ、美味しそう！有難うございますっ」

感激する美帆。

「じゃ、手洗いに行こう」

「あっ、はい」

二人の後ろをちまちまと着いて歩く梅。その後美味しくお茶を頂き、一息ついたところで、

「俺の部屋でアルバムでも見るか？」  
と提案する。

「あっ、見たい！です」

「よし」

嬉しそうにかっとならう雄三。

「うわあ！お部屋大つきですね」

「美帆が来るから、マジ掃除した（笑）元々物は少ないんだけどふっと笑って、本棚に向かう雄三。

ガラスの戸を開けて、

「俺が子供のときからの、たくさんあるから。つまんないもんだけど、どれでも見て」

「うわあーっ」

ガラス戸の前にぺたりと座り、取り敢えず一番左端にある“雄三〇〜二歳”というのを手に取る。

一番最初のページには幸せそうに涙ぐむお母さんと、まだ目も開いていない産まれたての赤ちゃん 雄三が写っていた。

パラパラと見て行き、中学生時代のアルバムになる。

ふと、中二からよく一緒に写るようになったらしい女の子が気にな

った。

「すごく、可愛い…。」

「雄三さん？」

思いきって尋ねてみる。

「この、すごく可愛い人って誰ですか？」

「瞬。びくつと体を動揺させ、」

「中学ん時のクラスメイト。皆が仲良いクラスだったから」

「…ふうん？」

少し違和感を感じたが、あまり突っ込まずにページを進もうとした。すると、

「ってかその辺は本当につまんないから、高校のにしなよ。なっ」  
慌てながら別の物を出してくる。

「そっちは後だもん」

パラ…

めくった先には手紙が一枚入っていた。

貼られている写真はさっきの女の子と、別の女の子、それに雄三と、もう一人の男の子の四人だ。

Wデートかなあ…。

ぼんやり考えながら写真を眺める。

「み…美帆??」

美帆が黙っているので怒っているのかと思ひ、声をかける。

「あつ、なんか手紙入ってたよ？」

我にかえった美帆はまだ開封されていない花柄の封筒を手渡した。

「…え？」

思いがけないものだったらしく、目を見開いて受けとる。

美帆からチラッと見えた文字は、はっきり“実悠より”と書かれていた。

そのまま読まずにポケットに入れようとする雄三。

「えっ、なんで読まないんですか？」

美帆はアルバムの続きを見始める。

「あ……うん」

それでも手紙を読まずに、雑誌を読み始める雄三。

「……」

チラツ

雄三にそつと目をやる。

雄三はいかにも先程の手紙が気になっていようで、かさかさとポケットに手を入れたりと落ち着かない様子だ。

ふうっ

漏れない程に軽く溜め息をつき、

「雄三さんっ、おトイレ拝借して良いですか？」

「ああ、うん。階段の突き当たりだから」

はい、と言いながら立ち、スカートをぱんっとはらう。

ガチャ…

パタン

廊下に出て、くすつと笑う。

雄三さん、これであの手紙読めるかなあ？

変に遠慮したりして…付き合ってるワケでもないのに。

ぷっ

なんか面白いなあ。

カチャ

パタン

時間を見計らってから部屋に入る。

少し慌てた風の雄三。

少し早かったかな。

くすっ

また笑ってしまう。

「雄三さん、私もう帰りますよ」

少し口角を上げながら、平坦な口調で告げる。

「えっ、なんでっ」

ベッドにもたれかかっていた体を乗り出し、少し慌てる。

「もう梅ちゃんも見ましたし…」  
やることないんだもの。」

「あっ、じゃあDVDでも見る？防音のDVDルーム作ったから  
「かつこいいですね でもまたいつかにしますよ」

雄三は何か悪いことをしたかと焦った。

「そう、わかった」

がっかりしながらも引き止める術を知らないので、引き下がる。  
玄関で。

「おもてなし出来ませんで…またいらしてくださいね」  
と、水嶋さんが言ってくれる。

「いたせりつくせりで、嬉しかったです。本当にお世話になりました」  
た」

にこやかにお礼を言う。

お母さんには、もう会えないかな。

もう一目、あの颯爽とした女性を見たかった。

とても惹かれる何かを持った、凜とした人だと思った。

「そう言っで頂けると光栄です。お気を付けてお帰りください」

「はい、有難うございました」

「美帆、駅まで送っててくよ？」

雄三さんが何度も言ってくれる。

「一本道なんで平気です。まだ三時だし」

「うん。そうだけど…」

まだ何か言いたいことがあるような雄三。

それを感じながらも、

「それじゃあ失礼しますね」

さようなら、と言いながらドアを開ける。

一度振り返り、お辞儀をしてドアを閉めた。

カシャンと門を閉め、駅に向かおうとする。

すると、その駅の方面からやって来た、可愛い顔立ちの、でも無表

情な黒髪の少女がじつと美帆を見つめてくるのに気付いた。

一瞬戸惑ったが、気にせず歩き出すと、

カシャン

さっきの美帆と同じ音を立てて門を開けた。

！

驚き振り向いた時にはもう少女の姿はなく、湿った風が頬を撫でただけだった。

## 9：箕村家（後書き）

今回、長かったですね。元々パソコンで書いていた話で、長いという意識がなかったのですが：携帯で打ち直すと、親指が痛くて（笑）でも本当、小説は楽しいです。どうか皆様、ご感想送ってくださいね。

あの子、雄三さんの妹さんだったのかなあ…。  
それにしてもやたらと印象が違った。

雄三はもつと優しく明るい性格がにじみ出している顔だから。

パーツとして見てみると、例えば目自体は似ているかもしれない。

だが、あの冷たい眼差しは似ても似つかない。

同じ家庭に育ったのに…何故こつちも違うのだろう？

《今日は有難うございました。1つ聞きたいことがあるんですけど、私が雄三さんの家を出てすぐに妹さん帰ってきませんでしたか？》  
気になった美帆は、本当に妹だったのか、雄三に確認を取ってみることにした。

…ん？メールか。

サイレントにしてたから気い付かなかった。げ。

なんで恵実が帰って来たこと知ってんの…。

会ったのか…？

アイツ、無愛想だから妙な雰囲気を漂わせたに違いない。

《あー、会った？》

やっとメールが届いたと思ったら、この間の抜けた返事はなんだろう。

あー、というのは面倒臭がっているニュアンスとしても受け取れる。

《はい。お話出来なくて残念だったよ。》

メールは今まで丁寧語にしていたので（無意識にだが）、いつも話すときのようにタメ語も混ぜておいた。

《アイツ、今日はうつすら機嫌悪かったから…なんかしなかった？

（笑）》

《え？なんかつてなんですか！（^-^;）》  
いつもなんかするのよ、と突っ込みを入れつつ質問する。

《目で訴えるというか…。や、なんでもない。（笑）》

《??？まあ、良いです。でもやっぱり妹さんだったんだ。》  
ただの独り言とも言えるメールを送る。

《そっだよ。》

と雄三は打ちながら、メールを続けたのに話題がないもどかしさを感じた。

《よろしくお伝えください。それではまた》

あー、やっぱ止められちゃったよ。

少しわびしさを感じたが、仕方ないので静かに携帯をベッドの上に置いた。

今日、勝負に出ようと気合いを入れていたのに、結局タイミングを逃し良い雰囲気を作ることさえ出来なかった。

元はと言えば実悠のせいだぞ？

あんなトコに、似合わず手紙なんか隠しておくから。

何が“ビツクリしたかなあ？”だ。心臓が飛び出る程慌てたつづきの。

何が“まだ2人は付き合ってるかなっv”だ。お前からふったくせに。

何が“ずーっと、別れても仲良く出来るとイイね”だ。

お前が…浮気したクセに。

しかも俺に何も言わず、そっちもきちんとして説明しないで逃げやがって。

だから今も仲良く出来ねんだろーが…。

…けど。

なんか、ふつきれた。

お前もちゃんと俺が好きだったことあったんだろ？

だからこそ余計、罪悪感があったんだろ？

…そう、思うことにするよ。

## 11：戸惑い

「はぁーなんか、がっかり」

昨日の雄三の家でのことを思い出しながら、考える。

雄三の家に行きたいと美帆が思ったのは、ペットの梅を見たいという理由だけではもちろんない。

美帆は雄三の良さをわかっってきたつもりだし、本当に自分を支えてもらえるのではないかと期待したから。

そして美帆自身、雄三を好きになれるのではないかと思ったからこそだ。

だが実際は、ただ家に行ったただけになってしまい、期待した分だけ余計がつくりきってしまったのだ。

私だけが支えてもらうことを求めるのは、おかしいよね。それじゃあただ、相手を利用するだけになる。

そんな後ろめたいことはしたくないし、したらきつとすぐに別れることになる。

雄三さんも過去に何かあるんだろうな。

あの手紙だつてきつと、元カノか誰かからの物で他人には触れられない物だ。

今の私には関係の無いことだし。付き合ったりしたら、すぐ気になる物だろうけど…。

ピピピピ…

美帆の携帯が着信する。

『箕村雄三』…雄三さんからだ。

「もしもしっ」

何かな。メールじゃいけないことなのだろうか。

「おはよ。今平気？」

「うん、良いよ。何？」

「うん…あのさ、本当は昨日、言いたいことがあったんだけど。ちよっと、タイミング逃しちゃって」

雄三の、少し角張った声。

…緊張してる…?

「何、どうしたの?」

「驚かないで聞いてくれる?」

えっ、何かな。

驚くって…重大なことが聞けるのかも。大切な秘密とか??

こういうのドキドキする。

はあ〜楽しみになっちゃった。

「驚かないように頑張ります。早く教えてよ!」

わくわく。

「や、あのさ…」

うん。

「俺、美帆のことが好きだ。付き合ってほしい」

…。

……うん?

「え」

昨日、何もなかったから雄三さんはもう諦めたのかとまで思ったのに。

タイミング逃してたんだ…。

どうしよう。

「本当、急だけど…俺は初めて美帆を見たときから気になってて、好きになってたんだ」

雄三さんなら、って思ってたけど…でもわかんないよ。

タイミングが合わないって、致命的じゃない?

だめだ、まだ答えは出せない。

「私…昔付き合ってた人をまだうっすら引きずってて、正直まだ返事出来る感じじゃないんです。雄三さんのこと、人間としてすごく好きだし、尊敬もしてるんだけど…」

はつきりしないな、私。  
いらいらする。

「うん、わかった。すぐに返事なんてしないで良いから、ゆっくり考えて。可能性はあるんだろ？」

「あ、はい…」

「うん、じゃあまた」

「はい、また…」

ピッ

早まったか？

しくじったか…。

でも、なんとか思いは伝えられたはず…だよな。

俺は本当に美帆が好きだから、これからは積極的になる。

諦めない。

## 12：悩み事

誰にも相談出来ないのってキツいのかも…。

恋愛なんて、結局自分次第だとずっと思ってた。

相談してね、なんて言ってくれる人も所詮興味本意だし、そうしたところで結局は頑張っ！、で片付けられてしまうだろう。

自分の気持ちは自分じゃなきゃわからないのは、わかりきったことだし。

なら相談することは無意味だ、という結論に至っていた。

…のだが、いざ本当に悩み出すと本心なんてわからず、それどころかストレスさえ感じてしまう。

相談に乗ってもらおうという行為は、解決をする為でなく、ただ話を聞いてもらいたいからすることだったのだ。

今更わかって遅いよお…。

菜茄には好きな人がいたこともないと、強く言い続けて来たのだから。

他にも仲の良い子はたくさんいるけれど、菜茄に隠しながらだなんて逆にストレスが増えそうだ。

昴がいてくれたら

「…？」

自分の考えに疑問を抱く。

スバルって、誰。

「ヤバいー！架空の人物まで登場させちゃったよっ？！」

手頃なクッションを今座っているベッドから、壁に思いきり投げつける。手応えはない。

最近聞き出したお気に入りの洋楽集を流しながらリラックスを試みる。

てか、今時の若者はこんなに恋愛で悩まないのかも。

“次” ってもものもあるんだし、取り敢えず試しに付き合ったって良

くない？

そうだよ！雄三さんはすごい優しい人だし、心の隙間？みたいなのも埋まるよっ。

ダメならそれで別れれば…良いんだから。

楽しいノリの曲に合わせながら軽やかにメールを打つ。

“考えたんですけど、雄三さんはいい人なので付き合っても良いと思います。”

でもお互い負担になるのわイヤなんで、干渉せず気楽に付き合いましょーっ（\*^o^\*）”

…これで良いんだ。  
多分。

## 12：悩み事（後書き）

いやにあっさりと、でも心にもやもやしたものをお互いに残しながら、付き合うことになりました。今まで散々悩んで来たのに、これかい！とガツカリしないでください（笑） 続きをどうぞ

### 13：前向き

これは、一体どういうことだ？

いきなり投げ遣りとも取れる態度。

付き合えるのは嬉しいけど、イマイチじっくりこない。

「もしもし？今メール見たけど」

別に怒っているわけではないのだが、感情の無い声になる。

「あ、そうですね。昨日あれから考えて、やっぱり付き合おうかと思っただんですが…どうですか？」

イヤなら別に良いですよ、という口調。

「何、なんかあったの？」

じれったくて訊く。

「え、何も。どうかしましたか？」

普通…なのか…？

「あのお。美帆も俺のこと好きになってくれたの？」

「好き そうですね、なりそうですねよっ」

明るく答えてくる。

「ええーつと、じゃあ…」

別に断る理由はなく、嬉しいことなので、

「よろしく」

「はい でわまたー」

プチッ

電話が切れた。

付き合うことになった。

俺は昨日、これから長く片思い生活を味わい、アタックし続ける気でいたのに…。

あっさり幸せが手に入ってしまったようで怖い。

実際は、美帆はまだ自分のことを好きだというわけではないので、頑張っていかなければいけないが…。

「ふえー」

何ともなしに息を吐き、ベッドに倒れこむ。

彼氏が出来ました。

達也の次の。

だから…達也とは終わったんだよね。

や、前から終わってただけ。私の中でずっとくすぶってたから

…。

… 本当に、終わった？

終わったの…？

まだ、終わらないよ。

変わらないよ…。

だって達也と話せたわけじゃないから。

けど、今更話し合うことなんか出来ない。

遅すぎる…。

なんか、さっぱりしたいなっ。

気晴らしに美容室にでも行こうか。

ちよっとカットして、根元カラーリングして。奮発してトリートメ

ントもしちゃおうか！

うん、楽しくなってきた。

早速。

予約入れよう。

## 14：忘れ事

「あっそうですか！わかりました、よろしくお願いしますっ」  
「いやったあ〜！！」

美容室、明後日に行けるよ

いつも人気のカリスマ美容師さんだから、二ヶ月は待つつもりでいたんだけど、キャンセルが出たんだって！  
すごく嬉しい。なんか運命感じるよねっ（笑）

雄三とは夕飯後に電話で話したり、くだらないメールを送りあって笑ったり、前より良い感じになれた。

何より、雄三の温かさが美帆の心を溶かしてくれた。

明日は美容室だっ

今日は家でごろごろしよう。

ふと、自室の隅に置いてあるノートパソコンに目が行った。

すっかり埃を被り、無用の長物といった感じだ。

「あれー？私、パソコンなんて使ってたっけ」

今まで部屋の一部と化していたので気にも止めなかったが、よく考えればおかしい。

いつの間にかパソコンがそこにあった、というイメージしかない。

（久しぶりにやってみようかな）

「…あれ？」

自分の考えに疑問を抱く。前にもこんなことがあった。

自分の部屋にあるのだし、使ったことがあるのは当然なのだが、記憶にない。

なのに何故か、久しぶりだという気がする。

ピッ

起動させてみる。

見覚えのある壁紙。

やだな、なんで忘れてるんだろ。

頭を働かせようとするが、出てこない。思い出せない。

ズキッ

頭が痛くなり、思わず顔をしかめる。

左手で頭を押さえながら、インターネットに接続する。

無意識に打ったパスワードは一致し、体に染み込んでいるかのようだった。

ズキ…ズキ…

何…？

頭、痛いよ…。

画面の矢印を“お気に入り”に合わせる。

カチッ

クリック

「あ…っ」

美帆の目から、涙が枷を無くしたように溢れ出てきた。

## 15：心の傷

誰も自分のことなんか好きになつてくれないんだつて、思った。だから色々なトモダチと適当な距離を取り、休日には遊びに行く位の仲が一番良かった。

そうすれば誰からも“キライ”なんて思われずに済むから。人間の汚い部分に気付かないふりをして生きられるから。

誰かが自分から遠ざかることなんて、なくなるから。

一番信じていた人が行つてしまうことなんてもう、味わいたくない。そんな、道に迷つた私に優しく声をかけてくれた人がいた。

私のことを好きになる人がいるわけないつて声を … 言葉を荒げた私に、

そんなことない。

“美帆だから、好きになった。

美帆じゃなきゃ駄目だ”つて言ってくれる人がいるから。

その人を信じれば良いから、つて励ましてくれた。

私もそんな人に出会えるんだ…つて、幸せな気持ちになれたんだよ。有難う 昂。

「は…はは」

涙を手で拭いながら、微かに笑う。

なんで、こんなに大切なことを忘れていたんだろう。

“あの世界”にいた時の私は、やはりどこか病んでいたんだろうか。達也との最後のデートが終わってから、私は抜け殻みたいだった。

卒業式のアルバム写真を見ると、張り付いた、ひきつっただけの笑顔で。

この写真は封印しなきゃつて、棚にしまいこんだ。見て、あの気持ちを思い出すのが怖かったから。

いつまでもずっと、脱け出せないんじゃないかって、怯えてた。  
達也はそれだけ大きな存在で…。  
私の何がいけなかったんだろうと考える度、苦しくて、悲しくて、  
辛くて…。  
あの世界にしか私の居場所はないんだと、思ったんだ。

## 16：救い星

中学最後の春休み

カタカタ

「ふふふ」

カタカタツ

「ふふつ」

パソコンのキーボードを叩く音と、少女の笑う音。

これが、この部屋の日常だった。

人と関わりたくない。でも独りは嫌。

少女が：美帆が選んだのはチャットだった。

パソコンを使うチャットなら、相手を見ずに会話をする事が出来る。

この丁度良い距離間が何よりも心地良かった。

長い、長い暗い世界にいた美帆を救ってくれたのが、同じ世界にいた。だが輝いていた。昂なのだ。

昂から、あの言葉をもらったときに美帆は解放された。

何かがふつきれた。

美帆は、リアルな世界に戻ってきた。

その時、美帆の記憶にバーチャルな世界のことは消えてなくなってしまうていたのだが。

「何をするのも苦しくて、死にそうだった。昂は助けしてくれたのに…忘れてたなんて…」

美帆は、昂を忘れていたという罪悪感と共に、自分がそれ程までに達也のことで弱っていたことを知った。

こんなに弱いとは思っていなかった。

小学生の時に起こったイジメのような嫌がらせにも笑顔で耐えることが出来たし。

中学校生活での辛くキツイ部活をチームメイトが辞めていく中、残りのメンバーと励まし合い、競い合い、最後までやり遂げることが出来たのに。

精神を鍛えて来たと思ったのに…。

恋愛と、他のこととではこんなにも違うのだろうか。

昂に出会っていなかったらどうなっていたのか、なんて考えたくもない。

ただ、どこの誰かまわからない、言葉だけの繋がり of 彼にとっても感謝している。

今度こそ 達也から精神的に離れよう…そして、離れなきゃいけない、と思えるようになった。

明日は美容院に行く。

伸ばしていた髪を肩くらいまでに切ろう。

古典的だけど…さっぱりするから。

## 16：救い星（後書き）

お久しぶりです、栗山です。春々恋歌は最終話まで完成していますので、これからどんどん更新していこうと思います。応援・アドバイスなど、どうぞよろしくお願いします

## 17：幸日和

「おーし、メイクもばっちり」  
朝起きると、空白の時間を埋められたからなのかすつきり爽快だった。

お肌の調子も良く、美容師さんが担当しているアイドルにだってヒケをとらないわ、と自信满满で家を後にした。

着いた先では、髪の毛がきれいだ！と誉められ、写真を撮らせてほしいと言われた。

来週には店先の看板に写真が載る筈だ。

美容師さんに誉められることさえ初めてなので、嬉しかった。

今日はとても良い日だ。

そうだ。クレープを食べて帰ろう。

昔よく行ったクレープ屋さんで。

達也と一緒にたくさん来たっけ。

だからなんとなく…近寄りがたかったんだけど。

クレープを買い、近くの噴水に目をやる。

人混みの中で、浮かび上がるように目に止まった人がいる。

「！」

ばちっ、と視線がぶつかる。

うそ…。

なんで…。

今まで…昨日まで会いたくてたまらなかったのに…。

それでも、ずっとずっと会えなかったのに…！！

「達也…」

「美帆…」

同時に、相手の名前を呼んだ。

顔がひきつる。

心臓が、バクバクいう。

クレープを持つ手から、力が抜けていくのがわかる。

「あ…、元気？」

始めに口を開く。

一瞬びくつと体を跳ねさせ、

「あ、あ、うん。美帆も…なんか変わった…な」

途切れ途切れに話す。

なんか気まずいよ？

なんで…。

おーっす とかつて、明るくすれば良かった…。

「あ、今、美容院行って来たから」

「そか。そこの？」

「うん。昔から変わってないよ」

「…そか」

私は、変わってないよ。

不思議とそう伝えたくなった。

変わってない。

別れた時のままだって、自分に言い聞かせるかのように。

「クレープ食べなよ。アイス溶けちゃう」

「あっ、ああ。うん」

不意をつかれながら、口に運ぶ。

美味しい。

「座って、ちょっと話さない？」

2、3秒空白を開けてから、静かに頷く。

何かに導かれるかのように、いつもの いや、昔座っていたベンチに座る。

とにかくクレープを食べることに集中していると、達也が喋り始めた。

「…ずっと、美帆に会いたいと思ってた」  
うつ向き加減の達也。

美帆は思いがけない言葉に目を見張る。

だって、達也が私から離れて行ったのだから。

「ずっと、ちゃんと話したいと思ってた」

クレープが包まれていた紙をそっと握りしめ、達也を見る。

「美帆に、言わなきゃいけないことがあるんだ」

17：幸日和（後書き）

達也登場です。やっと出て来ましたー。パチパチ。（拍手）なんて  
浮かれている場合じゃないですね。応援してください皆様、本当に感  
謝しています。これからも精進して行きたいと思しますので、よろ  
しくお願いします

「美帆に、悪いことをしたのかなって、思った」  
ペットボトルの水を少し口に含み、話す。

え…？

“悪いこと”って、何。

そんなレベルだったの…？

「今だから言えるんだけど…俺、脅されたんだよね…」  
苦しい方をする。

「美帆と別れないと、美帆のことを…リンチするよ、とか言われてさ。最初は俺が守るから関係ねえよって、タカくくってただけど

…」

「脅された…？リンチ…？」

意味がわからない。

いきなりなんの話？

貴方には好きな人が出来たのでしょ？

聞いてないよ、そんなこと…。

「…実際、美帆の目の前に花瓶が落ちてきたり、家の表札が壊されたりしてたろ？俺、そんなの有り得ないから言いに行ったんだよ。

その…脅してきたヤツらに」

「うん」

相槌をうちながら聞く。

「したら…これからも美帆を危険な目に合わせるし、リンチも決行するから、さっさと別れな。って言われた」

危険…。

そう言えば、ガラスの破片が数枚、靴箱に入ってたこともあった…。

「俺、ずっと考えた。美帆と別れたくないけど、リンチされるなら別れるに決まってるし。…今は、警察に行けば良かったのかなとか思うけど」

「…そ…そんなことが、あったの？」

「驚かせてごめん」

「なら…どうして私に話してくれなかったの？当事者は私でしょ」

「美帆は正直だから、動揺しちゃって隠せないと思って」

「だって…。理由を言ってくれば、あんなに辛い思いしないで済んだのに…」

唇を噛む。

「辛いつて…何かあったの？」

「ばかつ、達也と別れたことだよ！達也は他に好きな人が出来たって、そう言ったじゃんっ！！だから、私、ずっと辛くて…誰も信じられなくなった…っ」

涙が溢れる。

「ごめん、口止されてたから…」

「盗聴されてるわけじゃないんだから、きつちり話してくれば別れたふりだって出来たでしょ？てかなんで、ウチヲを別れさせたかったの？」

目的は何？！

私は精神がおかしくなるくらい…ずっと苦しんだのに…っ。

「理由…？さあ、知らないけど」

「…なんで。理由もわからないで従ったの？」  
忘れてた…。

達也つて、大切なとこで又ケる人だったんだ！

「うん…。とにかくそうしなきゃって、慌ててた」  
やっでらんない。

「もう、いい」

私はベンチから立ち上がって、達也に別れを告げた。

## 19：愛し君

ずっと待ち望んでいた人に。

やっと会えたのが思いを断ち切る勇気が出た日だったなんて。

そして、自分から別れを告げることになるなんて、思ってもみなかった。

少し歩幅を緩め、ゆっくり歩く。

私は知ってる。

こんなとき彼は、決して追っては来ないことを。

付き合ってるときもそうだった。

喧嘩をしても、それは私が怒っているだけ。

立ち上がる私に、何も言わない。

…何も進歩してないんだ、私達。

おかしくって涙が出ちゃうよ。

「美帆っ！」

左手首を掴まれる。

「ひゃ?!」

勢い良く振り返る。

そこには、達也の顔。

「美帆：ごめん。俺が言いたいことは、たった一つだけなんだ」

「え：何？」

追い掛けて来るなんて。

進歩してないのは、私だけなのかな。

達也は、ちゃんと成長してる。

「俺、まだ美帆のことが好きなんだ。すごく後悔した：美帆を手放したこと」

私は、じつと達也の目を見つめる。

「でも俺が美帆に別れようって言ったんだから、忘れなきゃいけないって思い続けた。：けど、無理だった」

沈黙したまま達也を見る。

「だから今日も美帆に会えるかもって、思い出のクレープ屋に来たんだ。そしたら…やっ与会えた」

小さく頷く。

「それで俺、自分に嘘つかないって決めた。なあ、美帆…。もう一度やり直さないか？これからは絶対、美帆にも嘘つかないから」  
目の奥が熱くなってくる。

私が欲しかった言葉がここにある。

手を差しのべれば、手が届く。

達也はここに、いる。

## 19・愛し君（後書き）

サブタイトルの“愛し君”。深い意味を込めてみたのですが……紹介するのはまた今度にしますね。読んでくださって、有り難うございます。



ヤケになって付き合うなんてやめときゃ良かったよ。

でも、二股したって、別に……。

……ってバカ！んなことしてバレたら、達也とも雄三さんとも二度と会えなくなるやん！

バレなくたって二人を裏切ることになるし……罪悪感で生きてけないっ。

私はそういう悪いことって出来ない質なんだよ。

小悪魔な女の子とか、悪い雰囲気の人にも憧れや魅力を感じることはあるけど。

ああ……。

私は、一体誰のことが好きなんだろう。

## 21：乙女心

二人を好きなときは、どっちのことも本当に好きなわけではないのだと聞いたことがある。

…でも。

でもね。

長年好きだった人をやっと諦めて、他の人と付き合いだして。そんな時に好きだった人が再び現れたら…。

わかんなくなるよ。

そんなもんじゃないの？

皆、自分が誰を好きかすぐわかるの？

私は、どうしても、二人を本気で好きじゃないなんて思えない。

二人共全く違うものを持つてる。

だから惹かれる…。

雄三さんは、『好き』をぶつけてくれる。

暖かく、明るく、そして優しく包んでくれる。

達也は…頼りなくて、ちよっぴり又ケてたりするけど、楽しい。

イライラすることも、ちよっと…いや、たくさんあるけど、お互いに通じ合えてるって思えるくらい達也の全部が好きだって言える。二人共私のイヤなところも全部わかっていてくれるから、私は素直に、時にワガママを言ったり出来るの。

私はどっちを求めてる？

そうだ…。あの質問を、しよう。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「うん？」

一呼吸置いて話す。

「達也は私のどこが好きなの？」

これを聞いて達也は照れた表情を浮かべ、

「うーん…そだな。強いて言えば、ハッキリしつつも可愛らしい性格と、キレイな目」

…そっか。

「ありがとうございます。じゃあちょっと、考えさせてください」  
少し儀礼的な言葉で、顔を笑わせながら、去った。

「…美帆。どうしてそんなに悲しそうなんだ？」

ぽつりと呟いた声に美帆は反応しなかった。

## 22：待ち詞

「ゆうぞーさんっ。これからどっかで会えませんか？」

達也と別れてから数時間後、自宅の近くの公園でさわやかな風に吹かれながら雄三に電話する。

「これからバイトで、後二時間位したら終わるけど。どこが良い？俺今新宿」

「んーじゃあ新宿に行きます。ってか……え？」

「何？」

「ゆうぞーさんってバイトなんてしてるんですか？あんなお金持ちなのに」

「や、お金稼ぎたいんじゃないよ。バイトがしたいんだよ。まあ…やりたいことしてお金入るんだから一石二鳥みたいなさ？」

…ん、ちよつと違うかも。

と口の中で言う雄三の声を聞きながら、

「じゃあバイト先に行くよ。どこ？」

「やつ、それは男がすることだし！別んどこにするべ」

いきなり早口で、何故かなまる。

「えーなんでなんで？雄三さんの働いてる姿が見たいようー」  
からかうように、だが半分本気で言ってみる。

「恥ずかしいからやめなさいっ」

こっちは本気で照れる。

「…なんか、怪しい。ハッ！もしかして浮気相手といるとかっ」

「いねえよ。俺は巷じゃ一途で有名なんだ」

「あははっ。巷って！」

二人で爆笑。

「ファミレスだよ。南口のペペル」

「ペペル？私、よく行くよっ」

「マジ？毎度有難うございます」

「やめれー、かゆいよっ」

「はは。じゃあもう行かなきゃだから、終りごろさりげなく来て」「はいはい」

いつもこんな感じでふざける。それが自然になってきた。でもまだ…あの言葉を期待しないわけにはいかない。

約束の時間少し前にファミレスに着いた。

「お、来たか。後5分だから待つてて」

おお…。

なんかテキパキしてるよ。

バスケットで鍛えたフットワーク？

「箕村君、あがって」

なんだか偉そうな人が声をかける。

雄三が美帆にアイコンタクトし、奥に引っ込んだ。

美帆は店の裏に行き、待機。

一分かからないくらいスピードで雄三が出てくる。

「ここ、時間に厳しくてさ。彼女来てんだから、五分位切り上げてくれりゃ良いのにな」

笑いながら喋る。

「私は雄三さんの仕事姿が見られて良かったよ。手際良かったね」

「丁度忙しかったし、美帆が来たからはりきった。格好良かったろ」  
雄三が軽く冗談めかして訊く。

「…悔しいけど、カツコ良かったかも」

真面目に答えると、

「えっ、いや照れるからっ。からかうなよ」  
また照れる。

そんな雄三を見ている美帆の口は思わず、

「…雄三さんて、可愛いね」

と真面目に言ってしまう。

「…今日の美帆はなんなの？やけに素直じゃん」

「いつもでしょ」

一瞬悩んだように空を見ながら、

「ま…ね。さてどこ行くか。ゲーセン？カラオケ？なんか食べる？」

「あ…その前に訊きたいことがあって」

雄三は不思議そうに見つめ、

「おう？」

と気の抜けた返事をする。

「えと…雄三さんはさっ。美帆のどこが好きなの？」

訊くのはすごく恥ずかしい。達也のときも本当は顔から火が出る程  
恥ずかしかった。

でも 諦めたくないから…。

「…ん？」

少し沈黙し、聞き返してくる。

「私の、どこが良いと思ったの？」

恥ずかしさを抑えながら、もう一度ゆっくりと訊く。

雄三は優しく笑い、

「どこかなんて言えるわけないじゃん。美帆って子が好きなんだし。

…美帆だから好きになったんだよ」

え…。

「…私じゃなきゃ、駄目だった？」

「うん。美帆じゃなきゃ駄目だよ」

そして慌てて、

「ってかこんなキモいこと言ってごめん。重いとか、思っなよ？」

「…うんっ」

雄三の顔を見て、美帆は目がなくなるくらい笑った。  
いた…。

本当にいたよ…。

…昴が、言ってた。

## 22：待ち詞（後書き）

今回が、一番のヤマだったとも言えます。ずっと捜していた詞が本当に現れた、すごく大切な場面でした。最終回まで秒読みです。読んでくださり、感謝感激です

## 23：盛沢山

「私、ちよつと悩んでたことがあつたんだけど…それ聞いてはつきりした。美帆は雄三さんのことが大好きだよ」

少し恥ずかしそうに、満開の笑顔で雄三を見つめる美帆。

「…ほんとに？良かった。実は俺、美帆は投げ遣りなんじゃないかって、ちよつと心配してた」

「へへっ。ごめんなさい」

ちろつと舌を出す。

「で、どこ行く？」

「…のんびり、歩こ」

ゆっくり、ゆっくり、時を刻んでいくように。

次の日、すぐに伝えたくてまだ朝だったけど達也に電話した。

「もしもし、達也？…うん、電話久しぶりだね。えと…まだ返事してなかったから、しようと思って」

…どうしよう…。

辛くつて言えないよ。

達也が私のこと、どれだけ好きでいてくれたかわかったから。

私から遠ざかつて行った理由も、全部私のためだったから…。

でも、私には雄三さんしかいない。雄三さんが、そう言ってくれたように…。

「私、他に好きな人がいるの。達也と別れてからずっと…一人でいたんだけど、やっと大好きだっと思える人が出来た」

達也以上に、大切だと思える人。

「それは、俺の代わりとかじゃなくて…本当に好きな人なの？」  
かすれた声で言ってくる。

「最初はきつと、代わりだったんだと思う。でも私自身、そんない

い加減な付き合いはいやだったからずっと拒んだ。今は心から、大切な人だよ」

「……もう付き合ってたりする？」

「うん」

「そっか…わかった。俺、美帆はずっと待っていてくれるんだろうって…甘えてたし、自惚れてた。いきなり言っ、困らせてごめんなあ…」。

やだ…っ。

「…泣かないで…？私、達也が好きだって追い掛けてくれたとき、すごく嬉しかったんだよ。達也のことはこれからもずっと、大切な思い出として残るから…」

…っ。

泣くな、ばか。

私まで泣いてどうすんの。

うっ…

「今までありがとう。これからも、友達でいてください…っ」

「……ああ、時間はかかるかもだけど、また友達として仲良くしよう」

泣きすぎた。

達也の涙はとても久しぶりに聞いたけど、それでも前のわけがわからない別れの涙とは違う、あったかい涙。

二人の気持ちは、通じてる。

また、一緒にここに来よう

思い出の中の達也の言葉が昨日のことみたいに思い出される。

ありがとう、達也。

報告しなきゃいけない人が、一人いる。

菜茄。

調子が良くて明るくて、一見いい加減なようにも見えるけど、本当は人一倍優しい子。

菜茄ならきつと、達也とのことを言っただけで大丈夫。

だけどね…。

そこまでは、言う必要がないと思うの。

言っただけでどうなる？意味がある？

菜茄がただ、へえ〜って思うだけで何が目的で言ったのかもわからないよね。

言わなきゃいけないときが来ればもちろん言うけど、そんな時が来るとは思えない。

親友だからってなんでも話さなきゃいけないわけじゃないし、私も菜茄のことを全部知ってるだなんて思っただけのもの。

雄三さんと付き合うことになった、それだけ伝えよう。

久しぶりの、菜茄への電話。

結局…夏休み最初の頃から連絡とってなかったな。

久々だから話すの楽しみ。

「もしもし菜茄？おはよー」

ふああ…

菜茄の欠伸。

そっか、今まだ十時だったけ。

菜茄は予定無いと午後まで寝てる人だった！すっかり忘れてたよ。

「ごめん、いきなし電話しちゃって。また後でかけなおした方がいい？」

「や…：…うん、元気元気。大丈夫」

すぐく眠そう…。

とっさに電話してしまったけど、よく考えたら人を起こして、彼氏できたのって言うだなんて…：…相当非常識だ。それこそ、意味がわからない。

「ほんつとにごめん！くだらないことだから二時頃かけなおす」

これじゃはた迷惑な友達だ…。

「や、平気。目覚めてきた。それより、美帆が慌てて電話してくるくらいだから気になる」

慌ててたかな…。

「慌てたつもりはなかったんだけど…」

思ったことをそのまま伝える。

「だって美帆がこの時間に電話してくるなんて結構重大なことなんじゃない？もう起きたから、早く話して」

急かさないでよ…。

そう思った美帆だが、すぐに本題に入ることにした。

「雄三さん、覚えてる？」

「うん、恭迅の友達。忘れるわけないでしょー菜茄が合コンセットイングしたんだもん」

そうだった。

美帆は思い出す。

美帆と雄三を巡り会わせてくれたのは、何を隠そう菜茄だ。

「私、雄三さんと付き合うことになったよ。菜茄のお陰」

結局自分は菜茄に助けられていた。

新しい学校にすぐ慣れることが出来たのも、結局はタイプが違って見えた菜茄と仲良くなれたからだ。

「ああ、やっど？良かったじゃーん。おめでちよっ」

「ありがとうー！でも、やっどってどういう意味？」

ぷっ、と菜茄が笑うのが聞こえる。

「あのね〜ずっとお似合いだったよ？空気感とかぴったしだったし。逆になんでくつつかないのか不思議だった」

「そんなに？」

こういうのって当人はわからないものなのかな。

「うん。まあ、こうなるだろうな〜って恭迅と言ってたよ」

……あれ？

「恭迅さん？まだ連絡とってたん…」

「ああっ！！美帆に言っ てなかつ たかなっ！菜茄、恭迅と付き合  
出したんだよ。恭迅から告つ てくれたんだ」

菜茄が美帆の声を遮るように慌てて言う。

「るんるん気分が伝わつ てくる。そっかあ…菜茄も…」

「あつじやあ、このメンバーならダブルデート出来るね」

「ああ、美帆つてダブルデート憧れてたもんねえ。体調には気を付  
けてよ？」

菜茄が美帆のイタイところを突っ込む。

「はあい！元気でいきますっ」

笑いあう。

思いがけず、幸せな展開。これからも楽しいことが盛り沢山になり  
そうな予感。

夏が、もうすぐ終わろうとしている。

### 23：盛沢山（後書き）

たくさんの方に、カタをつけました。次回が最終回です。どうぞ最後まで、読んでみてください。読者の皆様本当に有り難うございます。

## 24：恋の歌

「雄三さんに、言わなきゃいけないことがあるかもなんだけど…」  
達也との電話の二日後、またバイト先の前で待ち合わせした。

「え、何？なんか怖いんだけど…」

不安そうに、そして大袈裟に後ずさってみせる雄三。

「怖くないよ。ただ…えっと、美帆の元彼の話をした方が良いのかなっと思つて。付き合ってるんだし」

すると雄三は微笑して、

「そんなことは別にしなくて良いよ。大事な思い出とかあるかもだし。付き合ってるからって、相手になんでも言う必要ないんだから」

「…そうなの？」

元彼や元カノのことって、どう扱うのが普通なのだろう。

これで良いのかな…？

「あつても、因みに元彼何人いる？」

「一人だよ。…雄三さんは？」

「俺も一人。たくさんいたらどうしようとか、ちょっと気になった」  
雄三は笑う。

…昔、男関係でなんかあつたのかな。

雄三は出会って間もない頃に美帆に対して感じたことを、再び思い出した。

最初は男を遠ざけようとする態度があつたから…。

いつか、機会があつたら聞いてみよう。

「ねっ、雄三さん家って何やってるんですか??」

「あー…貿易関係」

「…ふうん？」

雄三さん家って、やたらお金持ちだよな。

貿易関係ってなんなんだろ。

上流階級の家だったらどうしょ…。不釣り合いだとか言われちゃっ

たりして。

またいつか、機会があったら聞いてみよう。

「ねえ、雄三さん」

「ん？」

「私達って、これからだよね」

「だな」

雄三さんと過ごす日々には何があるのかな。  
たくさん大切な想い、見つかると良いな…。  
ずっと君と、歌を歌うよ。

素敵な春の、恋の歌。

## 24：恋の歌（後書き）

ついに終わりました。ここまで見てくださって有り難うございます。中学生の夏休みになんとなく思いついて、ぽつぽつと書き始めたこの作品。友達にしか見せていなかったのですが、このサイトを見つけ掲載することができました。文章力がなく、稚拙な部分はいなめませんが、これをきっかけに小説の楽しさや大切さを再確認することが出来ました。思い入れがとても強い作品だと思えます。まだまだ、たくさんの設定がありますので、続編として『秋色白書』を連載します。いつになるかはわかりませんが、見付けたら読んでみてください。沢山の読者様に恵まれた私はとても幸せ者だと思います。アドバイスを頂けたことも凄く嬉しいです。感謝は語り尽せませんが、これからも精進していきたいので応援、感想よろしく願います。しつこいですが、本当に有り難うございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1153a/>

---

春々恋歌

2010年12月19日14時17分発行